

「自校史教育」に関する基盤的研究

湯川 次義・久保田英助・野口 穂高
大岡紀理子・大岡 ヨト

キーワード：自校史教育、教養教育、大学、アイデンティティ、不本意入学者、アーカイブス

【要 旨】本報告では、早稲田大学における効果的な自校史教育の在り方を探究する目的から、他大学の自校史教育実践の分析と、本学で自校史教育を行う上で活用できる資料、教材、施設について検討した。その概要は以下のとおりである。まず、私立大学と国立大学との間では自校教育の位置付けが大きく異なっていた。私立大学は主として愛校心の育成に重点を置き、一方、国公立大学は大学で学ぶことの理念の周知を重視している。このような差異は、各大学が独自の立場から自校史教育のあり方を模索してきた結果であり、いずれの中にも倣うべき点があったと考える。また、本学には百年史をはじめとして、自校史教育に活用できる多数の資料、教材、施設が存在しており、これらについて整理して体系づけることができた点もその成果といえる。また、学生の提出した自校史のレポートをタイトルから分析し、自らが学ぶ大学のどのような領域に学生が興味をもつのかについても明らかにした。ただし、早稲田大学の自校史教育も他大学の実践も発展段階にある。こうした各大学の動向に注視しながら、早稲田大学ならではのよりよい実践のあり方を模索し続けることが求められている。

はじめに

本報告は、近年多数の国公私立大学で実施されるようになった「自校史教育」（あるいは自校教育）について、その教育目的、カリキュラム、授業内容、授業形態、施設、評価方法、成果などの実態的検討を通じて、自校史教育の意義と特色を明らかにするとともに、本学における効果的な自校史教育の在り方を探ることを目的とする。

偏差値で学校を選択し、自分が学ぶ大学についての知識を持たずに入学してくる学生や、入学試験の結果として不本意ながらに入学した「不本意入学者」が増加している現今において、自らの学び舎の教育理念、教育目標、歴史的あゆみ、現在の状況を学問的・体験的に学ぶ重要性は高まっており、初年次教育や教養教育において自校教育を導入する大学・学部も増えている。自校教育には、以下のような2つの効果があると考えられる。

- ①自分が学ぶ（働く）大学への意識を高め、今後の大学の在りかたを考える作業を通じて、学生・教員・職員が大学に対する「意識」を共有し、大学全体の活性化がはかられる。
- ②自分の大学を見つめ直す過程のなかで自己への意識を深め、充実した学生生活を実現するとともに、今後のキャリアプランやライフプランなど、個々人の生き方について考える機会を提供できる。大学で学ぶ意義を考え、学習への積極的姿勢を育むことができる。

本報告において、高等教育段階の自校史教育の特色や意義を明らかにし、本学における効果的

な自校教育のあり方を探求することは、学生と教職員が大学のアイデンティティを共有し、個々人が自己のアイデンティティを確立するための基盤的知見の一つを提供するものとする。

なお、本報告は2年間にわたる個々の研究者の調査結果をまとめたものであり、本学における自校史教育の充実に向けて、今後、更に研究を進め、実践を重ねていかなければならない。

(野口 穂高)

第1節 私立大学における自校史教育

近年、自校を把握していない学生・教職員に大学を理解してもらうための「自校史教育」を授業に取り入れる大学が増加している。具体的には建学の精神、学校の歴史や将来像、創設者・研究者・卒業生などの人物、成果を上げている研究活動、大学の利用方法、その大学と社会との関わり等を学んでもらうことである。自校史教育は、授業の期間や対象学年も大学によって異なっているが、全体的な傾向として、学部横断的な共通科目として設定しており、必修ではなく選択制とする場合が多い。また、担当教官も複数人で持ち回る形式が多く、学長・卒業生・地域の関係者などをゲストとして呼ぶ場合もある。

2002年10月27日に朝日新聞が自校史教育について取り上げ、「偏差値で大学を選んだものの、学ぶ目標を見つけれず悩む学生に、独自の伝統や校風を紹介することで自信や誇りを持たせる狙いがあるようだ」と述べている。また「大学自身の存在意義を見つめ直すことにも一役かっている」と述べている。これらのことより自校史教育は幅の広い教育目標があることがわかる。2002年の段階で、自校史教育を開講している大学は、明治大学、京都大学、立教大学、名古屋大学、広島大学であったが、近年はその数も増え、私立より国立の大学の方が力を注いでいる状況にある。しかし、山口拓史によれば、「自校史教育の実施については国立大学よりも私立大学の方が先行していた」という⁽¹⁾。その理由として山口は、「私立大学ではいわゆる『建学の精神』に基づくアイデンティティの追及が不断に求められる過程で、自校史というのが常に意識されている傾向が強いこと」を挙げている。このような先行する私立大学の事例を検討することは、本学における自校史教育を考えるうえで不可欠と考える。そこで、本節では、早期より自校史教育を実施している私立大学として、立教大学と明治大学の2校を取り上げ、科目設置過程や現在の教育内容を明らかにする。

1. 立教大学の事例

近年、自校史教育の重要性が認識され実践する大学も多くなっているが、立教大学は早い時期より開始している。その最初の試みは、1997年度前期総合A「大学論を読む」という授業において「立教大学とは何かを考える」というテーマで講義が行われている。その後、1999年度からは、「歴史学の多様性」という科目に「立教大学を考える」という授業が開設され、2001年度から「立教大学の歴史」となり、現在では資料センターが担当し「立教大学の歴史」と「立教学院と戦争」とが開設されている。

「立教大学の歴史」の授業では、1974年に刊行された立教大学の歴史を概観できる『立教学院百年史』とその後、創立125年に刊行された資料集『立教学院百二十五年史』がテキストとして

使用されていた。しかし、授業は資料センターの研究スタッフが担当するため、それぞれのスタッフが専門とする分野を反映させたものであり、必ずしも教育内容が統一されたものではなかった。そこで、2007年授業用テキストとして、『立教大学の歴史』が刊行され使用されている。このテキストは、従来の研究成果を踏まえた立教大学の簡便な「通史」ともいえるものである。一方、「立教学院と戦争」の授業では、参考図書として研究論文をまとめた『ミッション・スクールと戦争 立教学院のディレンマ』が作成され使用されている。

次に、表1⁽²⁾より2002年度から2008年度までに自校史教育の科目を受講した学生の推移を明らかにする。

この表より「立教大学の歴史」受講者は延べ1,589名、「立教学院と戦争」受講者は延べ701名と多くの学生が受講していることが明らかになった。受講した学生の多くは、立教大学の歴史や苦難を知り、より大学に対する愛着や誇りを持ち大学の発展を担っていきたいという感想を述べている⁽³⁾。また、受講生の感想より大学に対するイメージや意識の変化を促す効果があったことがわかった。さらに、歴史の中で変化していく大学の様子を知り、物事の変化を大きな視点から柔軟に考えていくことの重要性を感じた学生もいた。これは自校史教育の持つ意義や効果というものが、単に自校の歩みを知るということに留まらず、さまざまな可能性を秘めていることを示していると言えよう。

続いて、表2⁽⁴⁾、表3⁽⁵⁾より2008年度の授業内容について明らかにする。立教大学の自校史教育は時系列に授業が組み立てられており、社会の状況と学校の状況とを組み合わせた形で講義が進められているのがわかる。また、キリスト教による教育との関わりが深いため、立教大学の特徴として授業の中でも大きく取り上げられていると言えよう。

立教大学で自校史教育を取り入れた一番大きな要因は、学生が「自校」の特質や性格をまった

表1 自校史科目開講状況

年度	科 目	受講者数 (人)
2002	立教大学の歴史	227
2003	立教大学の歴史	686
	立教学院と戦争	104
2004	立教大学の歴史	100
	立教学院と戦争	94
2005	立教大学の歴史	116
	立教学院と戦争	130
2006	立教大学の歴史	67
	立教学院と戦争	108
2007	立教大学の歴史	183
	立教学院と戦争	127
2008	立教大学の歴史	210
	立教学院と戦争	138

立教大学『大学教育研究フォーラム』第14号より作成

表2 「立教大学の歴史」2008年度の授業内容

1	オリエンテーション
2	聖公会の日本伝道と創立者ウィリアムズ
3	立教学校の誕生
4	文部省訓令第12号と立教学院の成立
5	高等教育制度の整備と立教大学の誕生
6	関東大震災による被害と復興
7	立教大学の拡大と戦争の影響
8	日米開戦とキリスト教主義教育の危機
9	戦局の悪化とキリスト教主義教育の危機
10	敗戦から学園の再建
11	新制立教大学への移行
12	高度経済成長期以降の立教大学
13	まとめ

立教大学『大学教育研究フォーラム』第14号より作成

く知らなかったことである。それは、日本の大学生の多くが不本意入学者であるという現状から、「自校」について何も知らずに入学しているためである。しかし自校史教育を受講した学生は、学校に対して愛校心を持ち、さらには自己発見・自分の「居場所」を発見したという感想を残している。このように、学生は自分の居場所を確認し、自分がどのような関わりの中で、存在しているのかを知りたいことを望んでいると言える。

表3 「立教学院と戦争」2008年度の授業内容

1	オリエンテーション
2	学院首脳陣におけるキリスト教と国家
3	近代日本のキリスト教宣教における教育事業
4	学院首脳陣ならびに構成員の戦争認識と対応
5	戦時下の外国ミッション教育の危機
6	「基督教主義ニヨル教育」から「皇国ノ道ニヨル教育」へ
7	医学部設置構想と挫折
8	理科専門学校の設立と文学部閉鎖問題
9	立教中学校と戦時動員体制
10	立教大学における教育と戦争
11	学生生活と戦争
12	立教大学における研究と戦争
13	戦時体制下の立教大学の朝鮮人留学生たちの民族的苦悩と受難
14	「立教学院と戦争」補遺－戦争が遺したもの－

2. 明治大学の事例

立教大学『大学教育研究フォーラム』第14号より作成

明治大学は、自校史教育を1997年より全学部の学生に開かれている総合講座（前期2単位、後期2単位）で開始した。その経緯は、『明治大学百年史』（全4巻）が完成し、その執筆をおこなった教員がその成果を学生にも還元したいという機運が充満していたためである。そして全学部の賛同が得られ、総合講座として明治大学史教育「日本近代史と明治大学」が始まり、まず和泉キャンパスで開講され、続いて生田・駿河台キャンパスなどで開講されることとなった。生田キャンパスには理工学部や農学部が設置されているので、理科系の学生が興味を持ちそうなテーマを加えて行われている。

開設の趣旨は、学生に日本の近代化とは何であったのか、また近代化との関わりにおいて明治大学はいかに生きてきたのかその歴史を考察させることであった。またそこから、学問的思考力を養成するとともに、健全な愛校心を形成することでもあった。さらに、当時の明治大学の学生は精神的拠り所を求めているとして、それに対応するためには歴史的事実と学問的論理によって、明治大学の歴史を学ぶ場を提供する必要性があったためである。

次に表4⁽⁶⁾より2000年度の内容を明らかにする。明治大学の自校史教育の教育内容を組み立てる原則⁽⁷⁾は、①「大学史の見方」を1限目に設置し、学生に明治大学の歴史を概略的につかまえさせること。②時系列にそって教育内容を配列すること。③大学にとっての事件や出来事を教育の内容とすること。④すでに開発された知識や発見された事実を教授することとしている。

上述の教育内容の組み立ての4原則のように、1限目に「大学史の見方」を設置し、2限目に「創立者の青春時代」が配置され、時系列を追った形で構成されているのがわかる。

このように学生が、自分の大学が近代日本のあり方にいかなる役割を果たしたかということを知ること、こころの豊かさ、自己の存在確認につながり、それは自信へと発展していくであろう。このような教育的効用をもたらすためにも、また明治大学の発展のためにも「自校史教育」

は有意義であると言えるであろう。また、学生同様、新任教員にも自校史教育が必要ということで2009年4月より実施されている。受講生の感想文には、近代史を教科書のように客観視するのではなく、大学史・大学生という一定の視点から近代史を学ぶことや歴史を学ぶ意義に気づいている学生もいた。また、自校史教育の授業を入学生や受験生に多く伝えられれば大学としても更なる発展を遂げると考える学生も存在していた。

講座開設の効用は、上述の学生の感想のように、学生が大学の歴史についての学問的認識・歴史像を形成する機会が与えられることである。そして、それは学問的認識にとどまらず、学生と大学の一体感を作り上げ、精神的に学生と大学とを結ぶことを強固にすることでもある。

今後の課題として、①大学の地理的要素を教育内容の中に入れる。②財界・法曹界・文学界・スポーツ界・芸能界などの卒業生をさらに発掘する。③総合講座のテキストとして明治大学小史をつくる。④発足当時から使用している教科名称「近代日本史と明治大学」を検討する必要があるとしている⁽⁸⁾。

小括

立教大学・明治大学の両校とも、「自校史教育」は愛校心の育成と学生が自信をもつことのきっかけを与えることを目的としていた。そして受講した学生たちの多くが、在籍する大学について正確な知識を得て、さらには自分とは何かという自己認識をつくりあげていた。自校史教育の試みは、建学の精神の確認・大学アイデンティティの共有に大きな威力を発揮する方法である。また、自校史教育が効果を発揮するには、大学自身が自校理解を深め正確な大学史の情報が不可欠だということである。つまり、「自校史教育」に重要なことは、自校の長所・短所を含めて全て受講者に伝え自校の特色をつくっていくことである。そのためにも沿革史編纂事業や大学アーカイブスの整備と活用が、授業の基礎にとって不可欠であると考えられる。

次に九州大学と東北大学を例に挙げ、国立大学の自校史教育について述べることにする。

表4 2000年度学部間共通総合講座

「日本近代史と明治大学Ⅰ・Ⅱ」

期日	テ ー マ
4 / 21	はじめに—大学史の見方
28	創立者の青春時代
5 / 12	明治法律学校の誕生
19	自由民権運動と書生たち
26	建学の理念と校歌（大学歌）
6 / 2	明治法律学校と校外生
9	民法典論争と刑法改正問題
16	明治法律学校の卒業生たち
30	明治法律学校から明治大学へ
7 / 7	アジア留学生と明治大学
14	地方で活躍した校友たち
9 / 29	大衆社会と大学問題
10 / 6	大正デモクラシーと明治大学
13	関東大震災と記念館（Lタワー）
20	昭和恐慌と「夜間部」
27	女子高等教育と女子部
11 / 10	予科と和泉校舎
17	戦争と明治大学
24	昭和戦前期の学生生活
12 / 1	戦後改革と明治大学
8	学生生活と自治活動
15	高度成長と学生気質
22	卒業生の今と昔
1月12日	総括—明治大学の現状と課題

立教大学『大学教育研究フォーラム』第14号より作成

(大岡 紀理子)

第2節 国立大学における自校史教育

本節では、国立大学の自校史教育について、教育目的、カリキュラム、授業内容、授業形態、施設、評価方法、成果などの検討を通じて、その特質を報告する。第1節で述べたように、大学における自校史教育は私立大学が先行する形で進められてきた。しかし、2004年の独立行政法人化に伴い、国立大学は「大学理念・目的の明確化と教育カリキュラムの改革を推進し、自校教育の導入に積極的」⁽⁹⁾に取り組んでいると指摘されている。そこで、本節では、国立大学のうち、かなり早い時期から自校史教育を実施してきた大学の事例として九州大学を、比較的最近になって自校史教育を開始した事例として東北大学を取り上げる。

1. 九州大学における自校史教育

九州大学は、1997年度から自校史の講座を開設しており、自校史教育について10年以上の経験と実績をもつ大学である。このため、九州大学における自校史教育がいかなる背景において導入され、その内容を充実させつつ、どのようにして現在の実施形態へと発展してきたのか、さらにはその内容的特質がどのような点にあるのかを明らかにすることは、本学における自校史教育のあり方を探るうえで、資するもの大きいと考える。

はじめに、九州大学の自校史教育及びそれらが設置されている「全学教育」の概要を示す。九州大学のシラバスによると、同大学における自校史教育に関連した科目としては、「全学教育」の「全学教育科目」に設置されている「九州大学の歴史」と「大学とはなにかーともに考えるー」が挙げられる。また、同じ全学共通教育科目に開設されている「伊都キャンパスを科学する」の中でも、キャンパスの歴史に関する授業が設定されている。

それでは、これらの自校史関連の科目が開設されている「全学教育」とは、九州大学のカリキュラムにおいてどのように位置づけられているのであろうか。九州大学の授業科目は大きく「全学教育科目」と「専攻教育科目」に分けられている。そして、全学教育科目と専攻教育科目とは「有機的な連関のもとで4年一貫の教育として行われ」ているという。このうち専攻教育は各学部・学科ごとに行われる専門科目であり、全学教育は「総合大学としての機能を生かす形で、全学的に協力して一体となって実施し、すべての学部・大学院・その他の全学の部局の教員によって授業が分担して行われ」ており、大学の全学生が共通して履修する教養教育的な科目である⁽¹⁰⁾。

九州大学の全学教育の教育目的は、「日本の様々な分野において指導的な役割を果たし、アジアをはじめ広く全世界で活躍する人材を輩出し、日本及び世界の発展に貢献する」人材を育成するという九州大学の教育目的の下、「各学部の専攻教育と互いに補い合いつつ、この目的を達成する上で基盤となる人間的素養を育み、また各学部の専門分野を学ぶ上で共通する基礎的な能力を培うこと」であるという⁽¹¹⁾。

次に、九州大学が自校史教育を導入した背景と、これまでの発展の様相を簡略に示すことにする。九州大学が自校史教育を実践するにあたり、中心となったのは同大の大学史料室である。大学史料室では、①資料の収集・整理・保存・利用、②資料の調査・研究、③教育、④情報提供を主な業務としているが、近年では教育に重点を置くなど、文書館の業務として自校史教育が明確に位置づけられた。このことは、大学史研究のアカデミックな研究成果を基盤として、同大の自

校史教育が構成されていることを示すものといえる。大学史料室は、同大学における最初の自校史に関する科目として、1997年度後期から「全学教育」の「全学共通教育科目」内に「九州大学の歴史」を開設した。さらに、1998年度には、「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」を立ち上げ、「九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（以下、P & Pと略記する）」に採択されている。『大学史料室ニュース』には、「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」を計画した背景を次のように述べられている。

一方で、私たちは学生気質の変化が気になり始めていた。それは短絡した偏差値至上主義の受験競争の中で、学生諸君の「学問することへの夢」が失われつつあることと関係している。学生諸君にとって大学は夢をみる場ではなく、ただの無味乾燥な人生の通過点になりつつある。九州大学が選ばれる理由は、受験産業が指し示した偏差値が妥当であったということであって、九州大学の持っている歴史的伝統によるものではなくなっているようなのだ。九州大学で学ぶことの誇りとは、先人の築き上げた伝統を引き継ぐことにある。このことを学生諸君とともに考え直さなくてはならないという気持ちが、大学史料室の仕事を積み上げていくなかで強くなっていった。

また、『大学とはなにか』によれば、大学が無味乾燥な通過点となった結果、多数の学生は「知」の主演としての自覚が欠落しているという。そして、そのような「学生たちがどうすれば＜知＞の主演たりうる問題意識を持つことができるか」、この問題を克服するために自校史教育に取り組んだという⁽¹²⁾。このことから分かるように、九州大学の自校史教育では、大学で学ぶということの意味を学生自らが主体的に思考することが授業の中心に据えられているのである。

そして、このプロジェクトでは、①大学史料室の蓄積を学生への教育として還元する、②自校史教育が大学の自己確認やアカウンタビリティのための基礎作業となることを証明する、③このような活動が大学のアーカイブセクションの重要な機能であることを確立する、の3つも目的を掲げ、2000年度まで研究がおこなわれた⁽¹³⁾。さらに、先発していた「九州大学の歴史」もこのプロジェクトの一環として取り入れられ、自校史教育に関する研究と試行授業が進展している。当時の受講生数は、1998年前・後期、99年前期の3学期間で合計157名であったという⁽¹⁴⁾。その内訳は歯47、農33、工27、理20、経11、文6、育3、医4人であり、理系の学生が多いことが特色である。このことは、文系・理系を問わず、幅広い専門分野を学ぶ学生たちの間で、自分の大学に対する興味関心が共有されていることを示すものといえる。

次いで1999年度には「九州大学の歴史」で得られた成果や問題点をふまえて「大学とは何かーともに考えるー」が同時開講された。「九州大学の歴史」の成果としては、自分の大学の歴史を知った学生が自分の大学（さらには自分自身）について非常に高いプラスイメージを持つようになったが、それが偏狭な愛校心の醸成にとどめることは避けたかったという⁽¹⁵⁾。さらに、同講座の受講者から九州大学の歴史のみではなく、「よりグローバルな大学史・大学論の授業を望む声が出された」ことも背景にあった⁽¹⁶⁾。そこで「大学とはそもそもどういう存在でありいかなる役割を果たしてきたのか、そしてこれからの課題は何か」というより広い視点から大学について考える講座を開設する必要性から授業を計画したという。しかし、授業をおこなう教員の側が「大学が何であるのか」深く理解しているのか、という疑問から、「ともに考える」のサブタイト

ルを付したことは、九州大学の自校史教育の特色である。つまり、大学に関して教員が一方的に講義するのではなく、大学とはなにかという問いに対して、同じ大学に集う教員と学生がともに考えていくという、双方向の授業が企図されているのであった。

この「大学とは何か－ともに考える－」は560名から受講希望（教室の関係上300名に制限）があるなど、学生の人気も高かったという。また、2001年にはP & Pの助成を受けた研究成果等に授与される第1回九州大学総長賞を受賞するなど、同大の自校史教育は学内でも高い評価を受けている。その後、両講座は2004年度まで並行して開設されていたが、「九州大学の歴史」に関しては2005年度のカリキュラム改訂以降、2007年度まで実施されなかった。2008年度からは同じ「九州大学の歴史」の名称で、小人数のゼミ科目としておこなわれている（表2を参照）。また、2005年度の伊都キャンパスの新設に伴い開設された「新キャンパスを科学する（現在は伊都キャンパスを科学する）」（総合科目）内に、「九州大学史と伊都キャンパス」という授業があり、キャンパスという視点から九州大学の歴史を学ぶ機会が設定されている。そして、冒頭で述べたように、現在では、「九州大学の歴史」「大学とは何か－ともに考える－」の2つの科目が、自校史教育に関連する講座としておこなわれている。次節ではこれらの講座の概要を報告する。

2. 九州大学における自校史教育の内容

a. 「九州大学の歴史」

同講座は1997年の後期（金曜5限）から開設された。選択制の科目で、主な対象学生は低年次（1・2年生）の学生とし、期間は半期であった。まず、講座の第1回から3回までは「高等教育制度の概説」を配置し、日本の高等教育の歴史についての教育を重点的に実施している。これは受講学生の多数が帝国大学や旧制高校・中学校・専門学校についての知識を持っていないため、これらをふまえなければ九大の創設についても理解することが困難であるためだという。次に、学生の関心の高い各部局の歴史について講義を行っている。さらに、新制大学移行直前の旧制松山高校を舞台にした「ダウントウン・ヒーローズ」（山田洋次監督）のビデオ視聴、講演会、「箱崎キャンパス」の見学を実施するなど、視覚的な面からの理解を促進するなどの工夫をしている。評価方法は毎回講義の最後に授業の感想や質問を記入させるとともに、レポートを実施している。

同講座の受講学生の感想としては、「大学に愛着がわき、誇りを持てるようになった」「地域の歴史や他大学の歴史について学べた」「大学生活に役立つ」「箱崎キャンパス以外のキャンパスも見学したい」「ゼミ形式により、調査や発表の機会を設けて欲しい」「九大の研究状況について知りたい」「半期ではなく通年にして欲しい」「授業計画・教科書が欲しい」などがあったという。特に学生が興味をもった分野としては、①所属学部の歴史、②医科大学創設時の福岡と熊本の誘致合戦、③九州帝国大学各学部の創設にあたって福岡県・福岡市・財界から多数の寄付が行われたこと、④学徒出陣・大学紛争など時代による学生生活の相違、が挙げられるという。

b. 「大学とは何か－ともに考える－」

同講座は1999年の前期（水曜4限）から開講された。「九州大学の歴史」と同じく半期科目で

あり、受講対象も同様に低年次である。履修条件として「この授業に期待すること」のタイトルでレポートを作成することを義務付け、履修者はこのレポートを提出したものの中から決定された。講義の内容としては、「九州大学の歴史」が冒頭に「高等教育制度の概説」を配して日本の大学制度の歴史についての講義を行っていたのに対して、本講座では「大学の歴史」として日本の大学史のみではなく世界的な大学史を配しているのが特色である。また、九大史や私大・専門学校¹の歴史についての授業を配しているものの、それ以外には建築学や大学自治、国際化、入試、地域社会、情報化社会など、幅広い視点から大学について考える授業が設置されているのも特色的である。

評価方法としては、毎回授業の最後にアンケートや感想を記入させている。

c. 「大学とはなにか－九州大学を通じて考える－」

同講座は2005年度のカリキュラム改定に伴い、副題を「ともに考える」から「九州大学を通じて考える」に変更したものである。同年度のカリキュラム改定以降、2007年度まで「九州大学の歴史」は開講されていない。そのため、講義内容には「九州大学の歴史」において実施されたビデオ鑑賞やキャンパス見学が組み込まれている。また副題が「九州大学を通じて」に変更されたこともあり、主な講義内容を継承しながらも九州大学を題材とする授業となった。評価方法は毎回の平常点と2回のレポート（2007年度の場合はビデオの感想と「大学で学ぶことの意味」）によって評価している。

以上が、九州大学における自校史教育の主な内容である。なお、2008年度からは、「九州大学の歴史」が、同じ全学教育の「小人数セミナー」内に開講されている。内容は以前の講座とほぼ同一だが、小人数によるゼミナール形式になった。また、これに伴い、「大学とはなにか」の副題も「ともに考える」に戻された。ただし、内容としてはキャンパス見学が実施されていないほかは、2005年度以降の内容をほぼ継承したものとなっている。これらの点から考えると、同行の自校史教育は、①学生のアイデンティティの確立と学ぶことへのモチベーション喚起という当初の目的から、②自分たちの大学の歴史と現状の再確認を通じて、大学そのものの意義や将来をもとに考えることに発展したといえる。一般的な大学論ではなく、自らが通う大学を題材として大学の社会的役割を意識し、それについて深く考える過程を経ることで、学生がその大学に所属する自分自身の社会的役割についても自覚的に思考し、「知の主役」として自らを確立することにつながるのである。

3. 東北大学における自校史教育

筆者らは、2009年1月9日に東北大学史料館を訪問し、同館の助教で、「歴史のなかの東北大学」の授業を担当している永田英明氏への聞き取り調査をおこなった。以下、この調査結果をふまえて、東北大学における自校史教育について、その内容と特色を述べる。

東北大学は、2007年度から「歴史のなかの東北大学」を開講した。国立大学では、九州大学が1997年に自校史の講義を開始し、広島大学、名古屋大学が1999年に開講していることを考えると、

2009年度で3年目となる東北大学は比較的最近になり自校史教育を始めた大学といえる。

その実施の契機としては、『東北大学百年史』の編纂があったという。このような大学史の編纂が、自校史教育の開講の契機となり、その編纂に携わった者が教育の担い手となり、さらにはその研究成果が教育の基盤となっている点は、自校史教育を実施している多くの大学と共通している。「歴史のなかの東北大学」は、同大のカリキュラムにおいて「全学教育科目」の「カレントトピックス科目群」内に設定されており、全学生のうち本科目を選択した学生が受講している。永田氏によると、履修者の数は2007年度が約50名、2008年度が30名であった。受講者の内訳は幅広く全学部にわたっており、工学部や理学部など理系の学生も多く、特定の学部に偏重していることはない。また、留学生の中にも自分が学ぶ東北大学の歴史に興味をもつものが多く、外国人学生も受講しているという。授業担当者の構成は、同史料館の教員を中心に、同大高等教育開発推進センター・文学研究科の各教員となっている。

2008年度の場合、具体的な授業の内容は表5のようである。表5からも分かるように、「歴史のなかの東北大」の特色は、授業の初回もしくは2回目に「キャンパス史跡散策」を設定していることである⁽¹⁷⁾。永田氏によれば、講義の前に史跡見学をおこなうことで、受講者に東北大学の歴史を視覚的に印象付け、その興味を引き出すことを目的にしているという。見学を通じて、その歴史を体感し感覚的な理解を得ることで、講義への効果的な導入を目指しているのである。授業の全体構成

表5 「歴史の中の東北大学」の授業内容

回数	授 業 内 容
1	キャンパス史跡散策 (片平キャンパスと史料館見学)
2	大学の歴史－東北大学について学ぶ前に－
3	東北大学誕生前夜－学都仙台の学生たち
4	東北帝国大学の誕生
5	附置研究所の誕生
6	東北帝国大学の学生生活
7	「門戸開放」の学生史－女子学生と留学生－
8	総合大学としての確立－法文学部設置と図書館
9	戦時下の東北大学
10	戦後改革と新制東北大学の誕生
11	川内・青葉山キャンパスの誕生と東北大学の未来

『東北大学史料館だより』10号より作成

は、時系列的な配置を基本としており、その時代ごとの特色的な内容をトピック的に取り上げている。授業の内容としては、歴史を中心に比較的にアカデミックなものが多いが、ほとんどの学生が十分に理解をして修了しているという。

また、東北大学の自校史教育では、「学生」の視点から同大の歴史を学ぶ授業が多いのもその特色である。たとえば、2008年度の場合、「東北大学誕生前夜－学都仙台の学生たち」「東北帝国大学の学生生活」「門戸開放」の学生史－女子学生と留学生－」「戦時下の東北大学」などが、東北大学の学生に関する内容となっている。同大の授業計画によれば、その内容は、明治中期の学生のありかた、東北帝大生の生活・文化活動・思想状況、大正期における女子学生への門戸開放や留学生の状況、戦時下における学徒出陣・学徒勤労動員など、各時代における学生の生活を多様な角度から取り上げている。学生にとって、より身近なテーマである学生生活を取り上げることで、学生の興味を引き出しやすいという利点があると考えられる。

また、戦前の日本における女性に対する社会的差別や戦争といった、大学で学ぶことを困難とさせる社会的要因について理解し、その状況の中で東北大生がいかに学んでいたことは、大学で学ぶこととはどのようなことなのか、またその価値や意義はどのような点にあるのかを考えさせることにつながる。たとえば、ある受講生は、「「門戸開放」の学生史－女子学生と留学生－」の授業後に次のような感想を寄せている⁽¹⁸⁾。

日本で初めて女性の入学を認めたと言うことばかり意識していたが、どのような大学生活を送っていたかはあまり考えたことがなかった。大正時代においては女性が学問をするということ、女性が男性と話をするということについて世間の目が今とは全く違っていた。当時の女子学生の方々は学問以外での、現在では不必要な苦勞も多かっただろうと思う。

また、戦時下の東北大学を受講した学生は、次のような感想を述べている⁽¹⁹⁾。

今まで東北大学の歴史について触れ、学生たちの学びに対する熱い思い、しっかりとした姿勢を見てきたので、戦争のために学びの期間を削られることは相当辛いものだったろうなと思う。しかし「お国のため」という時勢の中で不満を口にすることができずいたのだろうと思うと本当に残念だ。今回の授業を受け今自分が何の不都合もなく大学に通い講義を受けられていることは幸せなのだと強く感じた。

これらの学生の感想をみても、女性への高等教育の門戸開放問題や彼女らの学生生活への理解、戦時下の学生の状況と現在の自分たちの学生生活との比較などを通じて、大学で学ぶことに対する意義や価値について思考がなされていることがわかる。

さらに、2009年度からは、最終授業として、同大の理事で哲学者の野家啓一による特別授業が設定された。その内容は、「大学や学問の歴史と現状をふまえつつ、東北大学が抱える課題とその将来像について考える」⁽²⁰⁾とされている。単に大学の歴史を学ぶのみでなく、これまで学んだことをふまえて、東北大学の現状と課題を理解し、東北大学で学ぶ学生として、その大学の将来にどのように係っていくべきなのかを考える機会とするため、この講義が設けられたという。このことは、学生が受け身的に大学生活を送るのではなく、自らが所属する大学の歴史を形成するという主体的な意識をもつ契機となると考えられる。

授業に使用する教科書としては共通のものではなく、現状では各教員が自主的に資料を作成し授業時に使用している。これについては、『東北大学百年史』をふまえつつ、授業で使用する教科書を作成する必要が提唱されているという。また、学生の評価方法としては、授業への出席率と論述試験である。授業に自主的に参加するとともに、些末な知識を習得することよりも、自分なりに東北大学について思考し、その考えを表現できることが求められているのである。

また、東北大学の全学教育では「ミニツツペーパー」と呼ばれる用紙を毎授業配布し、学生が授業の質問・感想などを記入し、授業改善の一助としている。自校史教育においても、この「ミニツツペーパー」を活用し、学生の要望や意見などを収集し、授業内容の改善に役立てているという。また、東北大学史料館では、「歴史のなかの東北大学」のwebサイト⁽²¹⁾を開設しているが、このサイトにおいて学生からの感想を公開するとともに、その疑問点や授業中に話せなかった点について、補足的な説明がなされ、一方通行の授業にならないように工夫が取られている。

以上が、東北大学の自校史教育の目的・内容・特色である。ここで、同大の自校史教育につい

て、その特質を小括したい。東北大学の自校史教育は、学生の視点に立脚することが、その特色といえる。また、現代の学生にとっても身近な学生生活に焦点化した内容を多く配置することで、受講者の興味を引き出すと共に、大学史上の人々と自分たちとの繋がりを意識させている点も興味深い。さらに、それらの人々を取り巻く社会状況、とりわけ女性への社会的差別や戦争など、大学で学ぶことを困難とさせた社会的要因に対する理解から、大学で学ぶこととは何か、大学で学ぶことの意義を実感させることにもなるのである。さらに、最終授業を大学の理事に担当してもらい、現在の大学が抱える課題や目指すべき将来像を語ってもらうことで、東北大学の現状と課題を理解し、東北大学で学ぶ学生として、大学の将来にどのように係っていくべきなのかを考える機会を設置していた。このように、東北大学における自校史教育は、受講者が学生という立脚点から、過去と現在の繋がりを理解し、さらに現状とその課題を学ぶことを通じて、自らが所属する大学の歴史を形成する主体性を育むことが意識されている点に特色があった。

また、教育方法としても、自校史の導入として体感的・総体的な理解から入り、講義により詳細を学ぶ点や、「ミニットペーパー」を利用して、双方向的な授業になるようにした点など、効果的な学びへの工夫がなされているのである。

小括

本節では、九州大学と東北大学における自校史教育について報告した。九州大学の自校史教育は、自分たちの大学の歴史と現状を題材として、大学そのものの意義や将来をともに考える授業となっていた点に特質があった。自分が所属する大学を題材とすることで、学生がその大学で学ぶ自分自身の社会的役割についても自覚し、主体性をもって大学生活を送ることが期待できるのである。東北大学の自校史教育も、九州大学と同じく、学生に学生の視点に立脚した点が大きな特色であった。学生生活を題材とすることで、大学史上の人々と自分たちとの繋がりを意識するとともに、過去の学生生活との対比を通じて、大学で学ぶことの意義を実感させる内容になっている。そして、受講者が学生という立脚点から、過去と現在の繋がりを理解し、さらに現状と課題を学ぶことによって、自らが所属する大学の歴史を形成する主体者として成長することが意識されている点が特色であった。

両大学に共通しているのは、自校史を学ぶことによって偏狭な愛校心を育て、大学側が期待する一方的な「アイデンティティ」を押し付けるのではなく、知的創造の場としての大学の役割と意義を所属する大学の歴史を学ぶことを通じて学生が意識し、自らがその創造の場に参加していることを自覚させる点にある。そして、この自覚のもと、自らに期待される社会的役割を果たすために、主体的に行動できる人物を育てようとする点に特色と意義があるのではないだろうか。

これまで見てきたような、九州大学及び東北大学の自校史教育の実践から示唆を得れば、本学における自校史教育においても、学生が大学で学ぶことの意義や自己の社会的役割を自分なりに考えることを通じて、大学という創造の場を積極的に活用し、主体的に行動することができるような意識を育むことが重要と考える。そのためには、講義形式のみではなく、小人数クラスによりディスカッションの時間を多数確保することや、学生が自らの考えを発表する機会を多く設けることなども必要になるだろう。また、次節で示すような、自校史に関連する資料や教材、施設

などを有効活用しながら、学生が様々な観点から「早稲田で学ぶこと」「大学で学ぶこと」を思考する機会を増やすことが重要と考える。
(野口 穂高)

第3節 早稲田大学で自校史教育を行うには

以上の考察により、早稲田大学における自校史教育もまた、愛校心の醸成といった目標のレベルにとどまるべきではないことは明らかである。早稲田大学の学生としての社会的な責任の重さを自覚し、主体的に学ぶ意識・態度を養うための自校史教育のあり方を模索する必要がある。早稲田大学に対する厚い信頼は、125年の長い歴史の中で培われてきたものであり、早稲田大学の学生に対する社会の期待もきわめて大きい。ではどのようにすれば、そのような期待にこたえ得る存在に成ることができるのであろうか。それは、早稲田大学の歴史を客観的に学び、歴史的な観点から早稲田大学で学ぶ意味を考えていくことによって可能になるものであろう。ただし、過去の輝かしい業績をながめるだけでは歴史の本質を正しく把握することはできない。様々な問題点にも目を向けることが不可欠である。早稲田大学は数多くの著名人を生みだし、日本の政治、文化、科学技術など、幅広い分野に多大な影響を与え続けてきた。そうした早稲田大学関連の歴史資料は数限りなく存在している。したがって限りある時間の中で、何をどの程度まで扱うかという問題はきわめて難しい。そこで本節では、早稲田大学の自校史教育に活用できると思われる資料や教材、施設などを紹介することにした。

1. 早稲田大学通史

(1) 書籍

○早稲田大学史編集所編『早稲田大学百年史』(全5巻、別巻2冊、総索引年表1冊、)昭和53年～平成9年

『早稲田大学百年史』は早稲田大学創立100周年を記念して刊行されたものである。早稲田大学の総力を挙げ長い年月をかけて完成されたものであり、早稲田に関するあらゆることが記録され、早稲田大学史研究の最も信頼すべき書物となっている。全体で8千ページを超え、テキストとして使用することは難しいが、早稲田大学史の授業を考える上で、欠くことのできない資料であることは間違いない。なお、目次は早稲田大学大学史資料センターのホームページ (http://www.waseda.jp/archives/database/cent_index.html) から閲覧できる。

○佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』早稲田大学出版部、1991年

『近代日本と早稲田大学』は全544ページからなる大著であり、時代ごとに重要なテーマ、それに関わった人物をピックアップし、独自の視点から歴史的な考察を加えたものである。自校史教育で扱うべきテーマを考えるうえで参考になる著書の一つである。

○島喜高『早稲田大学小史』早稲田大学出版部、2003年

『早稲田大学百年史』のダイジェスト版といえる文庫本。本文221ページ(参考文献やあとがきなどを除く)で、テキストとしても用いることが出来る分量にまとめられている。はじめにの箇所「本書は、校祖大隈重信を始め、歴代総長、教職員、学生、それに校友たちの志操の一端を紹介し、直接には新入生に早稲田精神を会得してもらうべく執筆されたものである」と明記され

ていることから、自校史教育のために作成された書であるといえる。

○『大隈重信と早稲田大学』企画：早稲田大学、製作：映像プロ、2003年

2001年に製作された早稲田大学創立百周年記念映画『早稲田100年』のリメイク版。写真や文書などだけではなく、数多くの貴重な映像資料を用い、東京専門学校の設定から今日に至るまでの早稲田の歴史を、森繁久彌氏のナレーションによって紹介する記録映画である。大隈重信や坪内逍遙の生前の様子を肉声とともに知ることができ、視聴者は早稲田大学の歴史をよりリアルに実感できると思われる。また、全27分と教材に使用しやすい長さに編集されている。

(3) ホームページ

○「早稲田大学写真データベース」作成：早稲田大学大学史資料センター

<http://database.littera.waseda.ac.jp/shashin/>

早稲田大学大学史資料センター所蔵の写真データベースであり、早稲田大学創立から昭和初期にかけた早稲田大学および大隈重信他、関係者の写真資料を収録している。撮影時期や人物名、キーワードなどを入力し、必要な資料を検索する。

2. 稲門出身の著名人

(1) 書籍

早稲田大学の125年の歴史の間には、日本の各界に多くの著名人を輩出してきた。それぞれの人物と早稲田大学とのかかわりを知ることは、早稲田大学で学ぶことの意義や早稲田大学出身者としての社会的責任を知ることにつながるであろう。

奥島孝康・中村尚美監修『エピソード稲門の群像125話』（早稲田大学出版部、1992年）、早稲田大学社会科学研究所日本近代思想部会編『近代日本と早稲田の思想群像』（2冊、早稲田大学出版部、1981-83年）、『早稲田百人』（平凡社、1979年）などでは、早稲田大学出身の著名人が数多く取り上げられており、それぞれの人物の詳しい経歴や、思想などを知ることが出来る。また『早稲田百人』には顔写真や手紙などの写真も掲載されており、視覚的な資料としても用いることができる。これらの書を参考にして、自校史教育で扱うにふさわしい人物をピックアップし、さらに個別の研究を参照にし、さらに以下で紹介する資料館や博物館などで実際の資料に当たるなどして授業を準備するとよいだろう。

(2) 映像資料

○『わが青春の早稲田』監督：田侃、企画・製作：日本ビクター株式会社、製作：英映画社、2001年

「あなたはなぜ早稲田を選びましたか」、「最も記憶に残っていることは」、「早稲田スピリットとは何か」、「これからの早稲田に何を望むか」という4つの質問に対し、23名の早稲田大学出身の著名人のコメントが収録されている。早稲田大学の現代史を、早稲田大学関係者の生の声を通じて知ることの出来る貴重な資料であるといえよう。

3. 早稲田大学の資料室・博物館など

○早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

演劇博物館は、1928年10月、坪内逍遙博士が70歳に達し、さらに「シェークスピア全集」全40巻の翻訳が完成したのを記念して設立されたものである。錦絵46,000枚、舞台写真200,000枚、図書150,000冊、その他衣装・人形などの演劇資料52,000点をあわせて、数十万点にもおよぶ膨大なコレクションが保存されており、演劇人・映画人ばかりでなく、文学・歴史・服飾・建築をはじめ、様々な分野の方々の研究に貢献している。

○會津八一記念博物

創立以来、学内には、美術品や考古・民族学資料や大学史資料など、本学の発展や学術研究の成果を物語る膨大な資料が蓄積されてきた。これらの資料はいずれも貴重な文化遺産であるが、ほとんどの資料が非公開のまま学内各所に分散所蔵されてきた。そこで、これらの資料を一堂に集めて展示・公開するとともに、これら資料のさまざまな情報を蓄積して、学内外の研究・教育に活用できる環境をつくることを目的として開設された。

○早稲田大学 大学史資料センター

1998年に設立された、早稲田大学の歴史文書を取り扱う機関である。センターの目的は、早稲田大学の歴史と、創設者大隈重信および関係者の事績を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、大学の発展に資することにある。

資料を閲覧する場合、所蔵資料目録から閲覧を希望する資料を確定し、閲覧申込書に必要事項を記入の上、大学史資料センターまで送付する。所蔵資料目録は、大学資料センターホームページに掲載の目録などで参照できる。

まとめにかえて：石橋湛山をテーマにした自校史教育の実践

筆者は以上に紹介した資料や施設を用い、経済ジャーナリストであり早稲田大学出身の最初の総理大臣である石橋湛山をテーマにした自校史教育を実践した。これは早稲田大学の教旨の一つである「学問の独立」の意義と重要性を伝え、早稲田大学の学生としての社会的責任に気づかせることを目的とした授業である。前掲の『近代日本と早稲田の思想群像』を出発点としながら、姜克実『石橋湛山の思想史的研究』（早稲田大学出版部、1996年）や田中秀征『日本リベラルと石橋湛山』（講談社、2004年）で詳細を学んだ。また、前掲の『早稲田百人』に掲載されている写真も参考資料として用いた。

日本の発展に貢献した早稲田大学の出身者たちは実にユニークな人物ばかりであり、早稲田大学との関わり方はそれぞれまったく異なっている。しかし、彼らはいずれも「学問の独立」とその「学問の活用」に妥協が無かった点で共通する。この授業を通じ、数多くの先人の努力の上に現在の早稲田大学があり、延いては日本があるということを理解し、早稲田大学に入ったからには自らにもその歴史を引き継ぐ責任があることを自覚する一助になってもらえれば幸いである。

では、受け手側である学生は、自校史教育の意義をどのように認識しているのだろうか。学生の意識や関心を汲み取り、教員と学生が共同して早稲田大学ならではの自校史教育のありかたを探っていかなければならないだろう。

（久保田 英助）

第4節 学生のレポートから見た自校史教育の意義

筆者（湯川）は教育学部で担当する2008年度 of 教育学科教育学専修の授業（「教育学プレゼミⅡ」＝2年生全員＝受講者数約120人、「日本教育史研究Ⅱ」＝2年生以上の専門選択科目＝同約35人）の一部で自校史教育を行った。前者の授業において、学生に対して早稲田大学の歴史に関して興味をもつテーマを自由に選択させ、レポートの提出を求めた（2009年1月、レポート総数115点）。本節は、このレポートを主にタイトルから分析し、自らが学ぶ大学のどのような領域に学生が興味をもつのか、その一端を明らかにするものである。

筆者が自校史教育を行うねらいは、自分が学ぶ大学の歴史、意義、特色などを知り、自校に一定のアイデンティティーをもつとともに、今後の学習生活に意欲的に取り組むようになることに置いている。また、講義内容について簡単に記すと、教育学プレゼミでは、5回にわたり、中世大学の起源と大学の社会的意義について講じるとともに、大隈講堂についてのビデオ（早稲田大学作成）、最後の早慶戦（NHK放送）のビデオを鑑賞した。また、日本教育史研究Ⅱでは、15回にわたり早稲田大学の全体的歴史、女性の大学教育の歴史について講じるとともに、招聘講師として慶応義塾大学の非常勤講師を招き、同大学の歴史を講じていただいた。また、早稲田大学の施設見学（演劇博物館・会津八一記念博物館・大隈記念室）を行った。

1. テーマの数的分類

筆者はかねて、通史的に叙述された大学沿革史がどのような内容から構成され、またどのような事項が記載対象になっているかについて整理し、その全体的傾向を把握した⁽²²⁾。学生のレポート内容を分類する枠組みとして、この拙稿で用いた分類を用いることにする。この他、大学の歴史を探る観点として、佐藤能丸は大学文化史を提唱し、23の項目を示している⁽²³⁾。

次頁の表6は上述の分類に基づいてまとめたものであるが、最も多いのが「1. 大学の創立やアイデンティティー」に関するレポートで、33点提出されている。学生が自分の属する大学の創立事情、創立者、理念に興味を示すのは、自然であり、自己のアイデンティティーを確認する作業ともいえる。このテーマでは、①の「創設」と②の「理念」の区別が困難で、両者が一体でテーマとされている場合も少なくない。しかし、あえて両者を区別すると①が18点で、②が15点となる。2番目に多いのが「6. 学生・学生生活」に関するレポート（21点）で、特に学生スポーツに関するものが多い。この事項が多いのは、学生生活の中で日常的に体験し、見聞する事柄をさらに詳しく知りたいという気持ちが、その背景にあると考えられる。3番目は「8. 時代と大学」で、20点提出された（「時代と大学」は、例えば、大学紛争が6-⑤の自治会に、女子学生については6-②などに分類することも可能である）。4番目は、「2. 大学全体と部局（学部等）の変遷」19点である。続いて、「4. 教育・教員・研究」（11点）、「5. キャンパス（校地・建物・施設設備）」（6点）、「7. 行事・出来事・事件」（3点）、「10. その他」（2点）となっている。「3. 大学の管理・運営・事務体制、財政」と「9. 図表・統計」が皆無であるが、その理由は、前者は学生にとって興味・関心が持ちにくい領域であり、また図表・統計そのものをレポートの内容とすることは困難なためと考えられる。

表6 記載事項とレポート数

記載事項	レポート数	記載事項	レポート数
1. 大学の創立やアイデンティティー (①創立に関わる事項、②建学の理念や学風の形成)	33 (28.7%)	6. 学生・学生生活 (①入学試験制度、②学生数の推移、③資格、④学生生活、⑤自治会、⑥留学生の派遣と受け入れ、⑦卒業後の進路)	21 (18.3%)
2. 大学全体と部局(学部等)の変遷 (①大学全体の歴史、②学部・学科、③大学院と学位制度、④研究所・センター・付属図書館等、⑤附属学校、⑥学内外の関連団体)	19 (16.5%)	7. 行事・出来事・事件 (①入学式、卒業式、式典、②事件、学内問題、不祥事、③火災・地震、④周年事業)	3 (2.6%)
3. 大学の管理・運営・事務体制、財政 (①管理・運営・事務体制、事務組織、②財政、③学則・規則、④事務組織、⑤学部運営と教授会、⑥刊行物)	0	8. 時代と大学 (①時代の変化と大学、②戦争と大学、③学生紛争、④近年の大学改革動向、⑤女性と大学、⑥大学の将来像・方向性)	20 (17.4%)
4. 教育・教員・研究 (①教育、②学科課程・カリキュラム、③教員組織、④研究体制・研究組織、研究施設・研究費、⑤研究業績、⑥公開講座、校外教育、通信教育)	11 (9.6%)	9. 図表・統計 (①図表・統計、②年表・索引)	0
5. キャンパス(校地・建物・施設設備) (①キャンパスの選定・移転、②建物・施設、③農場・演習施設、④学外施設、⑤教材・教具、実験器具)	6 (5.2%)	10. その他	2 (1.7%)

2. テーマの内容的特徴

それぞれの分類にそって、興味深いテーマを取り上げ、学生の関心のありどころを分析する。「1. 大学の創立やアイデンティティー」(33点)については、「早稲田大学の歴史～大隈重信について～」といった表題が典型的ということができ、学校の創立と大隈重信の生い立ちや思想について扱っているものが多い。それ以外に、大隈が「日本の近代化に与えた影響について」、「小野梓の家族観からみる早稲田大学の建学の精神」といった特色あるテーマも見られる。また、創立や学風の形成にかかわる人物としては、大隈重信、小野梓、高田早苗が取り上げられている。多くのレポートは創設や学風に共感しているが、しかし「早稲田大学の『在野精神の限界』」といった批判的観点からまとめられたレポートもある。さらに興味深いテーマとして、「早稲田と慶応はなぜライバルなのか」「早稲田大学の歴史－私立学校と官立学校－」などをあげることができる。また、校歌について扱った「『都の西北』の歴史－なぜ歌い継がれてきたのかについて考える－」も興味深い。

次に、「2. 大学全体と部局(学部等)の変遷」(19点)について見ると、「大隈の逝去と新総長制度」といったタイトルも、学生の思考の深さが窺える。また、「教育学部の歴史と現状」、「教育学専修」の歴史、高等師範部と戦後の教育学部の「特徴と独自性」といったタイトルが散見されるが、これらは自らが属する教育学部、学科・専修に対する興味・関心に基づくテーマと言える。

る。一方、他学部である文学部の歴史をまとめたものも1点あった。さらには、「清国留学生部」の歴史や大学院の歴史を扱ったレポートもある。この他、図書館の歴史を「外国文化の窓口」といった観点からまとめたものや生協の歴史を取り上げているものもある。

次に「4. 教育・教員・研究」(11点)について見ると、教育の面では、中国語教育について、教育学専修必修科目の「教育学研究」の歴史、「エクステンションの歩み」といったテーマが設定されており、学生の興味の広がりを感じられる。一方、教員の研究活動については吉村作治客員教授のエジプト研究を扱ったもの、さらには本学におけるロボット研究の歴史について、人間のためのロボットを求める」というサブタイトルでまとめたものがある。また、本学における「政治学史」、「近代の文芸活動」、「文学の起源」、「演劇博物館の歴史」、国際化の歴史をまとめたレポートもあり、学生の思考の幅広さを感じることができる。

「5. キャンパス(校地・建物・施設設備)」(6点)については、「大隈講堂の歴史」、「建物の変遷」、施設拡充の歴史、キャンパスの形成史、「周辺の古本屋の歴史」が取り上げられている。キャンパスと学生街が一体となった早稲田大学の特徴がこれらのレポート作成の背景にあると考えることができる。学生が大学周辺史に興味をもった点に注目したい。

「6. 学生・学生生活」に関するレポートでは、特に学生スポーツに関するものが多い。ラグビー部・スキー部、早稲田交響楽団など自分の属するクラブの歴史をまとめたものがある一方、観戦する立場からスポーツの歴史を扱ったものがある。後者の例としては、野球の早慶戦の歴史や箱根駅伝の歴史をまとめたものがある。また、野球部の歴史について飛田稲洲を中心にまとめたものもある。このように、早稲田大学におけるスポーツの伝統を校風と結びつけるレポートも少なくない。その他、「清国留学生部」「大学入試からみる早稲田大学」といったレポートもある。

「7. 行事・出来事・事件」(3点)については、「早稲田騒動」(1917年)が2点、「研究室蹂躪事件」(1923年)が1点となっている。

「8. 時代と大学」(20点)を内容別に示すと、第二次世界大戦時の早稲田大学を扱ったものが5点で、この時期の学問の独立の行方や学徒出陣をテーマとしている。また、1960年代を中心とした学生運動が8点、女子学生の受け入れが3点となっている。学生が直接かかわらない時代であっても、特定の時代に起こった特色ある事柄への幅広い興味をもっていることが理解できる。さらに、大隈の125歳説と創立125周年(2008年)、本学のグローバル化など近年の大学改革に関するテーマも見られる。

「10. その他」(2点)のテーマは、「杉浦千畝が外務省を追われた理由について」、本学と「ホラー小説家の歴史」である。

小括

以上のレポートを評価の観点から見ると、ゼミ論文や卒業論文でないこともあり、資料を調査・分析してまとめたものではなく、先行研究や『早稲田大学百年史』からの引用や要約がほとんどで、必ずしも水準は高いとは言えない。しかし、既述したように、自分が学ぶ大学への学生たちの興味は深く、その歴史を学ぶことへの意欲の強さを感じられた。興味の幅の広さに感心するとともに、斬新な視点から歴史を学ぼうとする学生がいることも明らかになった。学生たちの

レポートの最後には、その課題の意義とともに、自校の歴史の重さや価値に対する新鮮な驚きが記され、さらには今後の学習生活への意欲が綴られることが多い。このようなことから、自校史教育はかなりの成果を上げ得ると見ることができ、意義あるものと考ええる。今回の分析はサンプル数が115と少ないが、今後はその数を多くし、自校史教育の意義をさらに探ることにしたい。

(湯川 次義)

おわりに

自らの大学についてよく知らない学生が増えた、などという指摘をしばしば耳にするようになったが、こうした傾向は早稲田大学においても例外ではないようである。自校史教育とはこのような学生に大学に対する思い入れを持たせる教育であるが、私立大学と国立大学との間で自校教育の位置付けが大きく異なっている点に注目しなければならない。私立大学における自校史教育の位置づけは、主に愛校心の育成にあった。一方、国公立大学における自校教育の最大の位置付けは、大学で学ぶことの理念の周知にあった。具体的には自学の目的・理念・使命の周知、学習意欲の促進や学習方法の指導などであり、自校史教育を通じて、学生自身のアイデンティティやキャリアの形成に寄与しようとしているのである。だからといって、自校史教育という名は同じであっても、私立と国公立とではその役割、方法などが根本的に異なるということを意味しているのではない。こうした違いは、それぞれの大学が独自の立場から自校史教育のあり方を模索してきた結果であり、いずれの中にも倣うべき点があることは言うまでも無い。ただ、これまでのところ各大学の実践経験を総括する機会が少なかった。そこで、本プロジェクトでは各大学の自校史教育の特徴を分析し、そのうえで早稲田大学ではどのような方法が可能かを模索したのである。

本報告は、個々の研究員が行った調査・研究・実践を紹介したものであり、それらの総括は今後の課題である。ただし本プロジェクトの中で行った実践はある一定の成果を残すことが出来たものと確信している。それと同時に課題を残していることも実感するに至った。早稲田大学だけではなく他大学の自校史教育も発展段階にある。こうした各大学の動向に注視しながら、早稲田大学ならではのよりよい実践のあり方を模索し続けることが重要といえよう。(大岡 ヨト)

注

(1) 山口拓史「国立大学における自校史教育の意義－名古屋大学を事例として－」『名古屋大学史紀要』11巻、2003年、92頁。

(2) 立教大学『大学教育研究フォーラム』第14号、2009年、83頁。

(3) 立教大学『大学教育研究フォーラム』第13号、2008年、37頁。

(4) 前掲『大学教育研究フォーラム』第14号、84頁。

(5) 『同前書』85頁。

(6) 『同前書』77頁。

(7) 『同前書』75頁。

(8) 『同前書』79頁。

- (9) 大川一毅「大学における自校教育の現状とその意義－全国国立大学実施状況調査をふまえて－」『秋田大学教養基礎学教育年報』8巻、2006年、11-21頁。
- (10) 九州大学「教育課程の概要」
<http://www.kyushu-u.ac.jp/student/education/summary.php> (2009年9月21日閲覧)
- (11) 九州大学「九州大学全学教育の目的と目標」
<http://rche.kyushu-u.ac.jp/youkou/purpose.pdf> (2009年9月21日閲覧)
- (12) 新谷恭明・折田悦郎「低年次教育における大学史・大学論の意義と大学アーカイブ」『大学史料室ニュース』19号、2001年、4頁。
- (13) 新谷恭明・折田悦郎『大学とはなにか：九州大学に学ぶ人々へ』（海鳥社、2002年）5頁。
- (14) 折田悦郎「『九州大学の歴史』『大学とは何か－ともに考える』の授業について－大学史・大学論の意義－」『大学史料室ニュース』14号、1999年、4-5頁。
- (15) 新谷・折田「前掲」、5頁。
- (16) 折田「前掲」、4-5頁。
- (17) ただし、2009年度は第6回の授業に設定されている。
- (18) 東北大学史料館「歴史のなかの東北大学（2009年度）担当教員より」
<http://www.archives.tohoku.ac.jp/kogi/2009/minute0609.pdf> (2009年9月21日閲覧)
- (19) 東北大学史料館「歴史のなかの東北大学（2007年度）担当教員より」
<http://www.archives.tohoku.ac.jp/kogi/kogi2007/mpnaga3.pdf> (2009年9月21日閲覧)
- (20) 東北大学史料館「平成21年度授業計画」
<http://www.archives.tohoku.ac.jp/kogi/2009/schedule2009.pdf> (2009年9月13日閲覧)
- (21) 東北大学史料館「歴史の中の東北大学」
<http://www.archives.tohoku.ac.jp/kogi/gaiyo2.htm> (2009年9月13日閲覧)
- (22) 湯川次義「大学沿革史の類型と記載事項」学校沿革史研究会『学校沿革史の研究 総説』（野間教育研究所、2008年）、132～170ページ。
- (23) 佐藤能丸『大学文化史－理念・学生・街－』（芙蓉書房出版、2003年）。佐藤の提案する項目は、高等教育史、教育法制史を除くと、おおよそ次のようにまとめることができる。A法人史、B創立者・功労者伝記、C学制・機構・制度史、Dカリキュラム史、E儀式・式典・行事史、F社会教育史、G経営財政史、H学術史、I文芸史、J教員史、K職場史、L福利厚生史、M学校紛擾史、N学生生活文化史、O学生サークル文化史、P学生スポーツ文化史、Q学生政治社会運動史、R国際交流留学史、S大学歴史写真史、T大学出版部史、U大学周辺（環境地域）史、Vカレッジソング史、W卒業生活躍史。

A Preliminary Study of School Institutional History Education

YUKAWA Tsugiyoshi, KUBOTA Eisuke, NOGUCHI Hodaka

OOKA Kiriko, OOKA Yoto

For the purpose of studying effective school institutional history education at Waseda University, this paper analyzes the practices of other universities' institutional history education and examines some records, teaching materials, and facilities which can be utilized for school institutional history education at Waseda. The summary is as follows. Each school's definition of school institutional history education differs between private and public universities. While most private universities mainly put stress on school spirit, most public ones make a point of publicizing internally their ideals of a university education. This can be said to reflect the difference between these two kinds of universities in their prestige relative to one another. However, both approaches have aspects worth considering. At Waseda, there are many records, facilities, and teaching materials available for school institutional history education, such as *One Centenary Anniversary History of Waseda University*, to name just one example. This paper attempts to classify and systematize these various materials. It is true that the practice of school institutional history education at Waseda and other universities is still being refined. Therefore, Waseda should consult other universities' practices and seek out a better approach to school institutional history education.